

# 『菩薩藏經』「四無量品」玄奘訳の問題点

——四無量心と四無量波羅蜜多——

象 本

## 一、はじめに

『菩薩藏經』(*Bodhisattvapiṭaka-sūtra*)には、梵漢藏四本が現存する。その梵文写本テキスト（以下、梵文テキスト）はオスロ大学のイェンス・ブロールビック（Jens Braarvig）教授や佛教大学の松田和信教授らによって校訂され近々出版される予定である。筆者は前述した両教授より出版前の梵文テキストの提供を受けた。そして、それを2本の漢訳と藏訳の3本と比較対照しつつ、全12品からなる<sup>1)</sup>本經の試訳を行った。その際に、玄奘訳に登場する「四無量波羅蜜多」という概念に関して、翻訳上の若干の問題が見いだせた。そこで、本稿では、『菩薩藏經』第五章「四無量品」の玄奘訳に登場する「四無量波羅蜜多」という概念を検討したい。

## 二、問題の所在

『菩薩藏經』「四無量品」<sup>2)</sup>の冒頭では、大蘊如来（mahāskandha tathāgata）によって、菩薩藏法門の器となった精進行童子（viriyacarita kumāra）に菩提道が示される<sup>3)</sup>。そして、『菩薩藏經』では「四無量品」冒頭より、菩提道

1) 『菩薩藏經』は諸訳にそれぞれ異なる品立てを有する。しかし、今は、玄奘訳の品の区分を用いて検討を行う。

2) 玄奘は「四無量品」と品名を立て、梵文写本、惟淨訳、藏訳の三つは「慈悲喜捨品」と品名を立てる。

3) ここでは、その内容を梵文テキストだけを示すと、次のようである。



波羅蜜多<sup>5)</sup>と、②四摂事であるとする。その一方、蔵訳では三点、①慈と、②諸波羅蜜多と、③四摂事であるとする。このように、以上の三訳本では、菩提道の内容が異なることが分かる。では、何故、「慈波羅蜜多」とする系統と、「慈と波羅蜜多」とする二種類の系統が登場したのであろうか。この問題の原因を探るべく、梵本の内容を見てみたい。梵文写本を直接に起こした内容は次の通りである。

ya di daṃ sa rva sa tve ṣu mai trī pā ra mi tā sū dyo ga ḥ saṃ gra ha  
va stu ṣva nu va rtta na tā a ya mu cya te bo dhi mā rgaḥ

当該箇所を整理すれば次のようになるう。

tatra katamo bodhimārgaḥ yad idaṃ sarvasatveṣu maitrī pār-  
amitāsūdyogaḥ saṃgrahavastuṣv anuvarttanatā ayam ucyate bod-  
himārgaḥ (MS54b1)<sup>6)</sup>

ここでは、菩提道の内容が yad idam に続き、列挙されている。ここに登場する maitrī pārāmitāsu という単語が恐らくは、漢訳と蔵訳の二系統の読みが生じた根元である。恐らくは、maitrīpārāmitāsu として、格限定複合語 (Tp.) と理解したのが玄奘訳や惟浄訳である。それに対して、maitrī pārāmitāsu として、maitrī の単数主格と pārāmitā の複数処格と、ばらばらの単語で理解したのが蔵訳である。このように分かち書きがされていない写本を読む時の差異によって、二系統の異読が生じたと言えよう。

そして、以上の検討から、次のような問題点が浮かび上がる。すなわち、maitrīpārāmitāsu と maitrī pārāmitāsu とはどちらが正しいのか、菩提道の

5) 玄奘訳では、「大慈波羅蜜。大悲波羅蜜。大喜波羅蜜。大捨波羅蜜」という四無量心でしている。

6) 当 MS のローマナイズは松田先生に頂戴したものを掲載している。



bodhimārgo yo (‘)yaṃ bodhisatvapaṭṭhako dharmaparyāyas(‘) (MS141 b6-7)

【訳】それは何故か。菩薩藏法門を懇慫に聞いて、受け容れて、記憶して、読誦して、熟達して、他人たちのためにも説いて、また他人たちにも詳細に解説して、三宝を途切れさせないために、正行が生じる〔故にである〕。また、四無量と離れなくなり、六波羅蜜多に専心することとなり、四摂事によって衆生たちを摂取するために精勤となる。舍利弗よ。この〔四無量・六波羅蜜多・四摂事〕の菩薩藏法門こそが、菩提道である。

ここでは、菩薩藏法門たる菩提道の内容として、四無量、六波羅蜜多、四摂事が挙げられる。故に、本経の「四無量品」の菩提道を説く箇所に登場した maitrīpāramitāsu という梵文原文は、maitrī と pāramitāsu の二つのことを言っている可能性が見受けられる。

## (二)、菩提道と『菩薩藏經』の品立て

次に、『菩薩藏經』の品立てを見てみたい。実は、玄奘訳「四無量品」すなわち第五「慈悲喜捨品」以後の品立ても、先程の菩提道の内容と対応が見られる。

『菩薩藏經』の四本の品立て				
	玄奘訳	法護等訳	藏訳	梵文写本
第一品	開化長者品第一	長者賢護品第一	ཁྱིམ་འདུག་གི་ལུག་ཁྱེད་ཀྱི་དང་པོ། (家主品第一)	grhapatiparivartto nāma prathamah    (家主品第一)
第二品	金毘羅天受記品第二	無怖夜叉品第二	ཁྱིམ་ཁྱེད་ཀྱི་འཇིགས་ཀྱི་ལུག་ཀྱི་གཉིས་པ། (金毘羅義叉品第二)	kimbhīrayakṣaparivartto nāma dvitīyah    (金毘羅義叉品第二)
第三品	試験菩薩品第三	菩薩觀察品第三	བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་བསྟན་པ་ ཞེས་ཅུ་པའི་ལུག་ཀྱི་གཉིས་པའོ། (菩薩觀察品第三)	bodhisatvapariṅṣā nāma tṛtīyah parivarttah    (菩薩觀察品第三)
第四品	如來不思議品第四	如來不思議品第四	དེ་པོའི་ན་གཤམས་པའི་བསམ་ཀྱིས་ མི་ཐུབ་པའི་ལུག་ཀྱི་པའི་པའོ། (如來不思議品第四)	tathāgatācīmtyaparivarttaś caturthah    (如來不思議品第四)
第五品	四無量品第五	慈悲喜捨品第五	ཁྱེད་ཀྱི་ལུག་ཀྱི་ལྔ་པའི་ལུག་ཀྱི་ གཉིས་པའི་ལུག་ཀྱི་ཐ་པའོ། (慈悲喜捨品第五)	maitrikarunāmuditopekṣāpari varttah pañcamah// (慈悲喜捨品第五)
第六品	陀那波羅蜜多品第六	布施波羅蜜多品第六	ཁྱིམ་པའི་པ་ལོ་ལ་ཁྱེད་ཀྱི་ལུག་ཀྱི་ (布施波羅蜜多品第六)	dānapāramitāparivartah ṣaṣṭah (布施波羅蜜多品第六)
第七品	尸羅波羅蜜品第七	持戒波羅蜜多品第七	ཁྱིམ་ཁྱེད་ཀྱི་པ་ལོ་ལ་ཁྱེད་ཀྱི་ལུག་ཀྱི་ (持戒波羅蜜多品第七)	śīlapāramitā parivartto nāma saptamah (持戒波羅蜜多品第七)
第八品	羼底波羅蜜多品第八	忍辱波羅蜜多品第八	འཛོད་པའི་པ་ལོ་ལ་ཁྱེད་ཀྱི་ལུག་ཀྱི་ (忍辱波羅蜜多品第八)	kṣāntipāramitā parivarttānām āṣṭamah    (忍辱波羅蜜多品第八)

第九品	毘利耶波羅蜜多品第九	精進波羅蜜多品第九	འཇིག་པ་ལྷན་གྱི་ལ་འོག་ཀྱི་ཕྱིན་པའི་ལཱ་ན་ཀྱི་དཔྱ་པའོ། (精進波羅蜜多品第九)	vīryapāramitāparivartto nāma navamaḥ    (精進波羅蜜多品第九)
第十品	静慮波羅蜜多品第十	禪定波羅蜜多品第十	འགྲུག་ལྟར་གྱི་ལ་འོག་ཀྱི་ཕྱིན་པའི་ལཱ་ན་ཀྱི་དཔྱ་པའོ། (静慮波羅蜜多品第十)	dhyānapāramitāparivartto nāma daśamaḥ    (静慮波羅蜜多品第十)
第十一品	般若波羅蜜多品第十一			
第十二品	大自在天授記品第十二	勝慧波羅蜜多品第十一	品名なし	品名なし

ここでは、第五品で四無量が説かれた後に、第六品から第十一品で六波羅蜜多が説示され、続く第十二品では四摂事が説示される。すなわち、四無量、六波羅蜜多、四摂事という三つの概念が第五品から第十二品の間で説示されるのである。

以上の二点からは、菩提道の内容については、蔵訳の解釈、すなわち①慈と、②諸波羅蜜多と、③四摂事の三種からなるとする解釈が正しいことが窺える。

### (三)、慈と四無量

では何故、四無量と言わず、「慈 (maitrī)」とだけしか述べられなかったのであろうか。この点については興味深い説示が『大智度論』に説示される。次の通りである。

『大智度論』：

問曰。慈有五功德。悲喜捨何以不説有功德。答曰。如上譬喩。説一則攝三事此亦如是。若説慈則已説悲喜捨。復次慈是真無量。慈爲如王餘三隨從如人民<sup>8)</sup>。

【訳】【問】慈が五功德を有することが説かれたが、なぜ悲喜捨が功德を有することを説かないのか。【答】先の譬喩のように、〔四者の中の〕一つが説かれたことは即ち、〔四者の中の他の〕三つが説かれたことである、ここでもそのようであって、慈が説かれたことは即ち、悲喜捨がすでに説

8) 「問曰。行是四無量心。得何等果報。答曰。佛説入是慈三昧。現在得五功德。入火不燒。中毒不死。兵刃不傷。終不橫死。善神擁護。以利益無量衆生故。得是無量福德。(中略) 問曰。慈有五功德。悲喜捨何以不説有功德。答曰。如上譬喩。説一則攝三事此亦如是。若説慈則已説悲喜捨。復次慈是真無量。慈爲如王餘三隨從如人民。」(『大智度論』二十三卷、T25.211a24-b14)

Cf. 「次論主伴。如龍樹言。慈爲如王。餘三隨從如民隨王。」(慧遠『大乘義章』卷十一、T44.689b28-29)

かれたことである。また、慈は真の無量であり、慈は王の如きであって、他の三者は〔慈〕に随従して人民の如きである。

のように『大智度論』では、慈悲喜捨の四無量は時々慈だけが説かれて他の三者である悲喜捨が省略される場合があることを示唆している。そうであれば、慈悲喜捨を説く本「四無量品」の当該箇所でも、*maitrī pāramitāsu* という梵文原文の中の *maitrī* は、慈〔をはじめとする四無量〕あるいは慈〔悲喜捨〕と解釈することが可能であろう。

#### (四)、波羅蜜多と六波羅蜜多

また、蔵訳の理解を資する用例は「布施波羅蜜多品」の冒頭箇所にも見いだせる。次の通りである。

梵文写本<sup>9)</sup>：

tatra śāriputra katamaḥ pāramitāsūdyogaḥ(/) et ā eva ś āriputra  
 ṣaṭpāramitāḥ yāsu pāramitāsūdyuktāḥ bodhisatvā bodhisatvacaryāṃ  
 caranti/ (MS58a2)<sup>10)</sup>

【訳】舍利弗よ。そこで、諸波羅蜜多に精勤することは何か。舍利弗よ。諸波羅蜜多に精勤する菩薩たちが菩薩行を行ずるところのものは六波羅蜜多である。

ここでは、「四無量品」に登場した *pāramitāsūdyogaḥ* とは六波羅蜜多に精勤することであると説明を施している。故に、「四無量品」の原文の *maitrī pāramitāsu* は慈〔をはじめとする四無量〕と、〔六〕波羅蜜多に分けられると見な

9) 玄奘訳：

爾時佛告舍利子。云何菩薩摩訶薩。爲阿耨多羅三藐三菩提故。精勤修習諸波羅蜜多行菩薩行。舍利子。菩薩摩訶薩行菩薩行者。即於是六波羅蜜多精勤修學。是則名爲行菩薩行。

(T11. 238c25-29)

惟淨訳：復次佛告舍利子。云何名爲於波羅蜜多發動精進。舍利子。若於六波羅蜜多勤精進者。此說是爲修菩薩行。(T11. 822b10-12)

蔵訳：

དེ་ལ་ཤེས་ཀྱི་པ་ལ་རྣམས་ལ་བརྟེན་པ་གང་ཞེ་ན། ཤེས་ཀྱི་པ་ལ་རྣམས་ཀྱི་ཕྱིན་པ་བྱུག་པོ་འདི་དག་ཉིད་ཡིན་ཏེ། གང་ལ་རྣམས་ཀྱི་ཕྱིན་པ་བྱུག་པོ་འདི་དག་ལ་བརྟེན་པའི་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནི། བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔལ་ནི་ཡིན་ཏེ། (P Wi 63b1-2; D Ga 56a5-6; H151b2-3)

10) 当MSのローマナイズは松田先生に頂戴したものを掲載している。

せよう<sup>11)</sup>。

## (五)、小結

以上、いくつかの視点から漢訳系統と蔵訳系統のどちらの解釈が正しいのか分析を行った。その結果、菩提道の内容は、四無量、六波羅蜜多、四摂事の三種十四法とする蔵訳の理解が正しく、漢訳系の理解が誤りであることが明らかとなった。そして、それら漢訳系の誤りは、バラバラの単語として理解すべき梵文原文の *maitrī pāramitāsu* を *maitrīpāramitāsu* という格限定複合語として理解したことに原因があったのであろう。

したがって、梵文写本の正しい読み方は、次のようになる。

tatra katamo bodhimārgaḥ yad idaṃ sarvasatveṣu maitrī pāramitāsūdyogaḥ saṃgrahavastuṣv anuvarttanatā ayam ucyate bodhimārgaḥ (MS54b1)

【訳】では、菩提道とは何か。すなわち、一切有情に対して、慈〔をはじめとする四無量心を起こすこと〕であり、諸波羅蜜多に精勤することであり、〔四〕摂事に随転することである。これが菩提道と呼ばれる。

## 四、四無量波羅蜜多はインド由来の概念であろうか

先の検討では、玄奘訳に登場する四無量波羅蜜多という概念が梵本の誤読により登場した概念である可能性が明らかとなった。では、玄奘訳に登場した四

11) また、同種の記述が、玄奘訳「四無量品」の末尾にも見いだせる。次のとおりである。  
如是舍利子。此薄伽梵大蘊如來。爲精進行童子。廣開示此四無量已。復爲開解六波羅蜜多及諸攝法。令是童子隨順修學。(T11. 238c19-21)

【訳】舍利弗よ。そのように、この薄伽梵である大蘊如來は、精進行童子のために、詳細にこの四無量を既に開示した、次は、六波羅蜜多と諸摂法を開示し、解説することであって、この童子を〔その六波羅蜜多と諸摂法に〕随順させ、修学させる。



無量波羅蜜多という概念はインドに由来するものであろうか。この点について、大乘仏教以外の資料や、大乘経論の資料を用いて、検討したい。

## (一) 大乘経論以外の資料

大乘経論以外の資料として、まずパーリ仏教の資料を見てみたい。パーリ仏教では、十波羅蜜 (dasa pāramī)<sup>12)</sup> が説かれる。例えば、ジャーカタの因縁物語には、「慈波羅蜜」 (mettā-pāramī) と、「捨波羅蜜」 (upekkhā-pāramī) が、その十波羅蜜中の第九、第十波羅蜜として説かれている<sup>13)</sup>。故に、南伝仏教では、慈と捨が、それぞれに波羅蜜と称することが分かる。しかしながら、この十波羅蜜中の「慈波羅蜜」と「捨波羅蜜」はそれぞれ、仏陀の有する法 (性質) を表現したものであり、四つそろっていないことから、四無量心とは直接的に関係しないものであると見なせよう。

次に、北伝の大乘経論以外の資料を見てみたい。例えば、『大毘婆沙論』中では四波羅蜜多説 (布施・持戒・精進・智慧) と六波羅蜜多説 (布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧) が登場し、また別説として、禪定波羅蜜多の代わりに聞波羅蜜多とする説も登場する (T27. 892a26-892c5)<sup>14)</sup>。しかしながら、何れにおいても四無量心を波羅蜜多として数えることはない。このように、北伝として伝わる、有部の『大毘婆沙論』に基づけば、四無量心 (慈悲喜捨) の何れをも含むような波羅蜜多説は見いだせない。

以上、大乘経論以外に見られる波羅蜜多説を検討した。その結果、いずれに於いても四無量波羅蜜多という概念が見いだせなかったことが確認できた。

12) この pāramī は、一般に pāramitā と同義として扱われている。 (古山 [1997] p97)

13) 『南傳大藏經』第28巻、p48-50

14) また、『増一阿含經』 (T2.645b1-3) にも六波羅蜜多が登場するが、おそらくこれも、特殊な波羅蜜多を指すのではないだろう。『増一阿含經』「序品第一」には次のようにある。

「人尊説六度無極 布施持戒忍精進 禪智慧力如月初 速度無極觀諸法」 (T2. 550 a13-14)

「序品第一」に従うのであれば、一般的な六波羅蜜多であったと見なせよう。

その他、印順 ([1981] p141) は、一般的な六波羅蜜多を主張していた部派として、法藏部 (Dharmaguptāḥ)、説出世部 (Lokottaravādināḥ)、根本説一切有部等をも挙げている。

## (二) 大乘経論の資料

次に大乘経論にみられる四無量波羅蜜多に近い概念を検討していく。大乘経論の内、四無量心である慈・悲・喜・捨を波羅蜜多と称する資料として、『菩薩藏経』の玄奘訳と惟浄訳と、『大般若波羅蜜多経』とが挙げられる<sup>15)</sup>。では、これらに見られる四無量波羅蜜多はインド由来の概念なのであろうか。検討してみたい。

15) この他にも、四無量波羅蜜多ではなく、「大悲波羅蜜」という語が単独で認められる資料として、後魏の菩提流支〈?-527〉訳『弥勒菩薩所問経論』（漢訳のみが存する）と、金剛智〈669-741〉訳『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』（漢訳のみが存する）とが挙げられる。しかし何れも四無量波羅蜜多が意識したものであるとは言い難い。

例えば、『弥勒菩薩所問経論』には、「大悲波羅蜜」という語が説かれる箇所は、論者が大海慧菩薩経を引用する箇所である。それは次の通りである。

而聲聞等先不修集慈悲方便。是故無有利益他行。漸斷煩惱後得羅漢。以是義故。大海慧菩薩經中説。菩薩先已 修集善根相應煩惱。所謂大悲波羅蜜等。此諸善法名為煩惱。非餘煩惱。依彼煩惱為化衆生住於世間。(T26. 238c28-239a4)

ここで、論者が大海慧菩薩経を引用しているのは、大海慧菩薩経の「善根相應煩惱」を説く箇所であろう。また、その「善根相應煩惱」の内容の詳細は、『宝性論』「一切衆生有如來藏品」において「大海慧菩薩経」を引用する箇所(T31.833c9-834b24)の他、曇無讖〈385-433〉訳『海慧菩薩品』(『大方等大集経』、T13.68a,b)と、惟浄訳『仏説海意菩薩所問浄印法門経』(T13.511b,c)にも見られる(宇井〔1959〕p549と、中村〔1967〕p92、註(3)を参照)。「宝性論」一切衆生有如來藏品においては、「大海慧菩薩経」が引用される箇所に、順次に現われる「大悲力」、「常不捨離諸波羅蜜結使」、および「大悲」、「我應修行諸波羅蜜」という事例や、「海慧菩薩品」に順次、説かれる「為衆生修集大悲」、「樂行惠施。具足淨戒。莊嚴忍辱。勤行精進。莊嚴禪支。修集智慧」という修集大悲と六波羅蜜の事例、また『仏説海意菩薩所問浄印法門経』に説かれる「常不棄捨大悲之鎧」、「永不棄捨波羅蜜多勝行」という事例などから、『弥勒菩薩所問経論』に引用され、「大海慧菩薩経」に説かれている菩薩が先に已に修集した「善根相應煩惱」という事例は、大悲と諸(六)波羅蜜だと推測できよう。従って、『弥勒菩薩所問経論』にあるこの「大悲波羅蜜」という語は、「大悲」、「諸」波羅蜜、という二つの内容を指しているのであろう。すなわち、それは、「善根相應煩惱」の内容中の「大悲」と「諸(六)波羅蜜」として、説かれていることが推測される。

また、『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』では、「大悲波羅蜜」という語が現われるのは、その第十「一切如來内護摩金剛軌儀品」の冒頭に説かれている偈文中の内容である。それは次の通りである。

金剛手薩埵 此名五種智 如來寂災密 為諸菩薩説 大悲波羅蜜 起四無量心 印明同四佛 亦名佛息災 (T18. 264b16-19)

『金剛峯楼閣一切瑜伽瑜祇経』では、「四波羅蜜十六大菩薩、四攝、八大供養」のことが説かれている。そして、その中、「四波羅蜜十六大菩薩」は、「四波羅蜜菩薩」(T18. 255a18)

## （１）『菩薩藏經』について

まず、本経である『菩薩藏經』から検討したい。玄奘訳『菩薩藏經』には、四無量心である慈・悲・喜・捨を波羅蜜多と称するのは二十一の箇所がある。その二十一箇所中、十七箇所は「四無量品」にあり、残る四箇所は「尸羅波羅蜜多品」にある。それらの箇所に番号を付けて次の三表で示す。

[illegible]

とも言い、東西南北の各四菩薩を指している。また、権田氏の、その偈文の「大悲波羅蜜起四無量心」に対する、「大悲波羅蜜は 四無量の心を起す」という訳、および「大悲波羅蜜 四波羅蜜を云ふ」という註から（「金剛手薩埵 此れを五種の智 如来寂災密と名く 諸の菩薩の為に説けり。大悲波羅蜜\*は 四無量の心を起す 印と明とは四佛に同じ 亦佛息災と名く。（\*大悲波羅蜜：四波羅蜜を云ふ）」（権田 [1994]、p43)）、この「大悲波羅蜜」は、四波羅蜜菩薩を指していること、すなわち、「大悲〔である四〕波羅蜜〔菩薩〕」、という意味で使われていることが分かるであろう。

『菩薩藏經』「四無量品」中の四無量波羅蜜多 (表1 b)				
玄奘訳	惟浄訳	藏訳	梵文テキスト	
5 童子當知。如是大悲作自所作。善作所作不變異作。爲諸衆生所應作。如是大悲。一切衆生如意圓滿。童子。是名菩薩摩訶薩。大悲無量波羅蜜。由成就是①大悲波羅蜜故。菩薩摩訶薩。觀諸衆生處如是位。復於彼所重興悲愍 (T11. 237c11-16)	又復菩薩自諸所行檀善所作。起大悲心。隨諸衆生應何所作。悲能圓滿衆生意願。此說是爲菩薩大悲。若諸菩薩摩訶薩。具足如是大悲心者。即能觀察衆生。悉令獲得如是等法。此乃菩薩思惟愍念起大悲心 (T11. 821b24-28)	大慈何故作善哉 隨諸衆生應作何法 起大悲心自諸所作 不變異作 爲諸衆生所應作 如是大悲 一切衆生如意圓滿 童子 是名菩薩摩訶薩 大悲無量波羅蜜 由成就是大悲心 菩薩摩訶薩 觀諸衆生處如是位 復於彼所重興悲愍 (T11. 821b24-28)	svakaraṇī sukratakarāṇī avikāraṇakaraṇī sarvasvatvaikamkaraṇī (Ms. kamkarāṇī.) sā cāśya mahākaraṇā yathābhūtiprāpīparipūrāṇī īyam ucyate bodhisatvānāṃ mahāsatvānāṃ mahākaraṇā yathā mahākaraṇayā samanvāgato bodhisattvā mahāsatvāh satvāṃ paśyāṃ īdrām (Ms. idrām.) avasthāpīprāptā<m> teṣāṃ cāntike kṛpākaruṇācittam utpādayati // (MS57a1-2) (〔大悲は〕自ら作ることであり、善行をすることであり、無変化をすることであり、一切の衆生に対して何れも作ることであり。そして、〔菩薩〕のその大悲は衆生たちの願望を十分に満足させることである。これが菩薩摩訶薩の大悲と呼ばれる。そのような大悲を備えている菩薩摩訶薩はその如き様子である状態によって負わされた衆生たちを觀察して、彼らのところで憐憫〔悲憫〕を起こす。)	
6 復次精進行童子。云何名爲菩薩摩訶薩。④大喜無量波羅蜜。 (T11. 237c17-18)	復次太子。云何是爲菩薩喜心。 (T11. 821b29)	又復太子。云何是爲菩薩喜心。 (T11. 821b29)	tatra katamā bodhisatvānām muditā' (MS57a2) (その中、菩薩たちの喜とは何か。)	
7 如是童子。是名菩薩摩訶薩。④大喜無量波羅蜜。若諸菩薩摩訶薩。住是④大喜波羅蜜。於一切時常得歡喜。勤求正法無有厭倦。起歡喜心修菩薩行 (T11. 238a21-23)	太子。如是所說是爲菩薩喜心。若住喜心菩薩摩訶薩。於一切時常得歡喜。勤求正法無有厭倦。起歡喜心修菩薩行 (T11. 821c21-23)	太子。如是所說是爲菩薩喜心。若住喜心菩薩摩訶薩。於一切時常得歡喜。勤求正法無有厭倦。起歡喜心修菩薩行 (T11. 821c21-23)	īyam kumārocayate muditā' yasyām muditāyām pratisthitā bodhisattvā mahāsatvā nityapramuditā bhavanti dharmaṃ paraveśyā' na ca khidyante bodhisatvācaryāṃ carantab' // (MS57a6-7) (童子よ。これが喜と呼ばれる。この喜に住んでいて菩薩行を修行している諸菩薩摩訶薩は法を求めることには疲労を感じせず常に歡喜が生じる。)	
8 復次精進行童子。云何名爲菩薩摩訶薩。④大捨無量波羅蜜。 (T11. 238a24-25)	復次太子。云何是爲菩薩捨心。 (T11. 821c24)	又復太子。云何是爲菩薩捨心。 (T11. 821c24)	tatra katamā bodhisatvānām upekṣā' (MS57a7) (その中、菩薩たちの捨とは何か。)	
9 何以故。由所不應作法無造作性故。是故菩薩深知非益而行於捨。若有菩薩摩訶薩。安住④大捨波羅蜜行菩薩行。則於一切惡不善法能興大捨。 (T11. 238c11-14)	諸所應作及不應作。彼一切法悉住平等。亦名爲捨。諸住捨行菩薩摩訶薩。乃至於彼諸善法分悉名爲捨。 (T11. 822a26-28)	諸所應作及不應作。彼一切法悉住平等。亦名爲捨。諸住捨行菩薩摩訶薩。乃至於彼諸善法分悉名爲捨。 (T11. 822a26-28)	iti hi yā akaraṇīyeṣu dharmeṣv akaraṇīyatā' (ī) īyam ucyate upekṣā' ' tasyām pratisthitō bodhisattvā mahāsatvāh sarvaṃ <a>kuśalalpākṣaṃ upekṣate<b> // (MS57b7-8) (だから、すべきではない諸法に対してはしないことである。これが捨と呼ばれる。その〔捨〕に安住している菩薩摩訶薩はすべての不善〔法〕の部分を捨する。)	
10 若諸菩薩摩訶薩。安住如是④四無量波羅蜜者。當知是則爲菩薩藏法門之器。又是諸佛正法之器。 (T11. 238c16-18)	無し	無し	無し	

『菩薩藏經』「尸羅波羅蜜多品」中の四無量波羅蜜多 (表2)				
玄奘訳	惟浄訳	藏訳	梵文テキスト	
復次舍利子。菩薩摩訶薩。行尸羅波羅蜜多時。復有十種清淨尸羅。汝今當知。云何爲十。 一者於佛淨信尸羅離心栽耕故。 (中略) 七者④大慈波羅蜜多尸羅。成熟一切諸衆生故。 八者④大悲波羅蜜多尸羅。困厄衆生令解脫故。 九者④大喜波羅蜜多尸羅。於彼正法生喜樂故。 十者④大捨波羅蜜多尸羅。於諸愛惡兩俱捨故。 (T11. 254c4-15)	復次舍利子。菩薩摩訶薩。復有十種清淨圓滿戒行之相。何等爲十。 一者菩薩堅持禁戒。於佛信解不退屈。 (中略) 七者菩薩堅持禁戒。於諸有情常起慈心而生慈(愍)念。 八者菩薩堅持禁戒。於諸有情常起悲心。於險難中而常救護。 九者菩薩堅持禁戒。愛樂正法如游園觀生大喜樂。 十者菩薩堅持禁戒。於違順境心常捨離皆悉平等。 (T11. 835a27-835b11) (T11. 254c4-15)	復次舍利子。菩薩摩訶薩。復有十種清淨圓滿戒行之相。何等爲十。 一者菩薩堅持禁戒。於佛信解不退屈。 (中略) 七者菩薩堅持禁戒。於諸有情常起慈心而生慈(愍)念。 八者菩薩堅持禁戒。於諸有情常起悲心。於險難中而常救護。 九者菩薩堅持禁戒。愛樂正法如游園觀生大喜樂。 十者菩薩堅持禁戒。於違順境心常捨離皆悉平等。 (T11. 835a27-835b11) (T11. 254c4-15)	punar aparaṃ śāritputrāparāṃ daśabhir ākārair bodhisattvaḥ pariśuddhaśīlo veditavyaḥ katamair daśabhir yaḥ idam' bhudhe prasādaśīlo bhavati akhicalitatayā' (中略) maṭṭrīśīlo bhavati sarvasatvapariṇāpanatayā' karuṇāśīlo bhavati vyaśanaprāptasatvapariṇāpanatayā' muditāśīlo bhavati dharmārāmapramodanatayā' upekṣāśīlo bhavati anuṇayapratighoṣṭjanatayā' (MS73b8-74a1) その他、舍利弗よ。知られるべきであるのは、他の十相によって菩薩は清淨戒〔が生ずる〕。 十は何か。すなわち、 煩悩心がないことによって、仏に対する清淨信の戒が生ずる。 (中略) 一切衆生を成熟させることによって、慈の戒が生ずる。 災難に陥る衆生を救済することによって、悲の戒が生ずる。 法を好んで大喜悅することによって、喜の戒が生ずる。 愛と憎を離れることによって、捨の戒が生ずる。	

このうち、惟浄訳にも二例、慈波羅蜜多が確認できる。その中、第一例（表 1 a-1）は、先の章で取り扱った「四無量品」の問題箇所であり、惟浄の誤訳と言えよう<sup>16)</sup>。また、第二例（表 1 a-1）は第一例を踏襲して加説されたものとして見て問題なかろう。そして、そうであれば、梵漢蔵四本の中、四無量心を波羅蜜多と称するのは、玄奘訳のみであると言えよう。

## (2) 玄奘訳『大般若波羅蜜多經』について

次に、玄奘訳『大般若波羅蜜多經』の記述を検討していきたい。玄奘訳『大般若波羅蜜多經』第297卷「初分波羅蜜多品第三十八之一」にも、四無量心を波羅蜜多と称する箇所がある。また、山田龍城〔1977〕「般若經五会諸本内容比較表」<sup>17)</sup>によると、当該箇所には、その内容と対応する2本の蔵訳がある。それは、蔵訳『二万五千頌般若經』の第29品と、蔵訳『十万頌般若經』の第30品である。それらを対照すれば次の通りである。

[illegible]

- 16) 惟浄訳には、「慈波羅蜜多」という語が二回にあるが、その原因としては、惟浄が玄奘訳につられた可能があって、梵文原文の *maitrī pāramitāsu* に対する誤読によるという理由を、既に前文において指摘している。
- 17) 山田（〔1977〕『梵語佛典の諸文献』付録表）
- 18) また、『大般若波羅蜜多經』第四百三十七巻の「第二分不可得品第四十二」の末尾に、それと同じ内容もある。即ち、違は次のようなものである。「世尊。如是般若波羅蜜多是佛十力波羅蜜多。佛言如是。達一切法難屈伏故。世尊。如是般若波羅蜜多是四無所畏波羅蜜多。佛言如是。得道相智無退沒故。世尊。如是般若波羅蜜多是四無礙解波羅蜜多。佛



上表中、玄奘訳には、下線部で示したように、四無量波羅蜜多（大慈波羅蜜多・大悲波羅蜜多・大喜波羅蜜多・大捨波羅蜜多）に関する記述が存在する。しかし、近似する内容を有するはずの、蔵訳『二万五千頌般若経』の第29品では四無量波羅蜜多に相当する内容が存在しない。その一方、蔵訳『十万頌般若経』の第30品では、位置が少しずれるものの、「大悲波羅蜜多（ཐིང་ཐེན་པའི་པ་ཚལ་ཏུ་ཕྱིན་པ་）」の語が見いだせる<sup>19)</sup>。しかし、当該箇所は、あくまで仏の十八不共仏法を意識した列挙である。そして、このような列挙は、藤田[1975]によって、「十力・四無畏・〔四〕無礙解・大悲<sup>20)</sup>・十八不共仏法」を併説して列挙することこそが、『大品般若経』の特徴であるとの指摘<sup>21)</sup>とも対応する。ゆえに、恐らく当

言如是。得一切智一切相智無罣礙故。世尊。如是般若波羅蜜多是大慈悲喜捨波羅蜜多。佛言如是。於諸有情不棄捨故。世尊。如是般若波羅蜜多是十八佛不共法波羅蜜多。佛言如是。超諸聲聞獨覺法故。」(T7. 203c17-27) このことから、「初分波羅蜜多品第三十八之一」にある「世尊。如是般若波羅蜜多是大慈波羅蜜多。佛言。如是安樂一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是大悲波羅蜜多。佛言。如是利益一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是大喜波羅蜜多。佛言。如是不捨一切有情故。世尊。如是般若波羅蜜多是大捨波羅蜜多。佛言。如是於諸有情心平等故」という内容は、「第二分不可得品第四十二」では、「世尊。如是般若波羅蜜多是大慈悲喜捨波羅蜜多。佛言如是。於諸有情不棄捨故」に簡略されたことが分かる。また、山田龍城氏「般若経五会諸本内容比較表」によれば、ここの「不可得品」は、梵本二万五千頌の「3 Sarvajñātādihikāracaryaviśeṣa p.」に属するが、『Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā III』（木村[1985]、p165-185）を検討すると、「不可得品」にあり、上に引用している経文の内容は、梵本二万五千頌にはそれと対応する内容はないことが分かる。また、玄奘訳「初分波羅蜜多品第三十八之一」には、「世尊。如是般若波羅蜜多是四無量波羅蜜多」(T6.509a15-16)という内容があるが、蔵訳十万頌と二万五千頌にはその内容がない。

- 19) ラサ版では、北京版の、「ཁལ་པ་ བཅོམ་ཐུན་འདུལ་ འདི་ལྟ་ན། རྒྱལ་རབ་ཀྱི་པ་ཚལ་ཏུ་ཕྱིན་པ་འདི་ནི་ཐིང་ཐེན་པའི་པ་ཚལ་ཏུ་ཕྱིན་པ་འོ་ (大悲波羅蜜多)!!」  
という内容の直前に、「ཁལ་པ་ བཅོམ་ཐུན་འདུལ་ འདི་ལྟ་ན། རྒྱལ་རབ་ཀྱི་པ་ཚལ་ཏུ་ཕྱིན་པ་འདི་ནི་ཐུགས་པ་ཐེན་པའི་པ་ཚལ་ཏུ་ཕྱིན་པ་འོ་ (大慈波羅蜜多)

「ཁལ་པ་ བཅོམ་ཐུན་འདུལ་ འདི་ལྟ་ན། རྒྱལ་རབ་ཀྱི་པ་ཚལ་ཏུ་ཕྱིན་པ་འདི་ནི་ཐུགས་པ་ཐེན་པའི་པ་ཚལ་ཏུ་ཕྱིན་པ་འོ་」という内容が増広されている。即ち、ラサ版では、「大悲波羅蜜多」が説かれている他、「大慈波羅蜜多」も説かれている。ラサ版は北京版とデルゲ版より新しくできたものであるため、ここではラサ版を採用しない。

- 20) また、大悲という語は『菩薩藏経』「如来不思議品」(梵文写本 (MS20b2)、玄奘訳 (T11. 208b22)、法護等訳 (T11. 795a26)、蔵訳 (P Dsi 315a2; H53b4)) では、如来の十不思議中の第九不思議として説かれている。

また、大悲であるが、雲井[1975] p77 は次のように述べている。

「大乘の諸經典において謳歌された仏教の思想は、仏の大慈悲であり、如来の大悲であった。」

- 21) 藤田[1975] p124 は、次のように述べている。

「『大品般若経』になると、「大慈大悲」は、十力・四無所畏・四無礙智・十八不共法など並説されることがさくばる多く、仏の徳の代表的なものとなすことが、いっそう明瞭になる。」

該箇所は十八不共仏法と関連する大悲が意図されており、四無量心のうちの悲無量が意図されたものではないであろう<sup>22)</sup>。

以上のことから、玄奘訳に登場する四無量波羅蜜多は関連する蔵訳と対応せず、さらには、思想的にも不適切であり、玄奘訳の独自性である可能性が窺える。

### (三) 小結

以上、本章では、四無量波羅蜜多という概念の調査を行った。その結果、四無量波羅蜜多という概念は玄奘訳にのみ登場する概念であり、何れの資料においても対応する蔵訳等より回収することはできなかった。このことから、四無量波羅蜜多という概念は玄奘訳により増設された概念である可能性が見いだされた。

## 五、結び

以上、本稿では、玄奘訳『菩薩藏經』の「四無量品」に登場する四無量波羅蜜多という概念について検討を行った。その結果、玄奘訳『菩薩藏經』に登場する四無量波羅蜜多という概念は、梵本中の *maitrī pāramitāsu* を、*maitrī-pāramitāsu* という格限定複合語として誤読に基づくものであることが明らかとなった。また、四無量波羅蜜多という概念は玄奘訳『菩薩藏經』と、『大般若經』にしか見出すことができなかった。さらに、いずれの対応する蔵訳等においても四無量波羅蜜多という概念は存在しなかった。このことから、玄奘訳

22) 十八不共仏法の内容は大乘のものとは小乗のものとで大きく異なる。大乘では、「諸仏身無失・口無失・念無失・無異想・無不定心・無不知己捨心・欲無減・精進無減・念無減・慧無減・解脫無減・解脫知見無減・一切身業隨智慧行、一切口業隨智慧行・一切意業隨智慧行・智慧知見過去世無閼無障・智慧知見未來世無閼無障・智慧知見現在世無閼無障」が挙げられる。一方、小乗では「十力・四無畏・三念住・大悲」が挙げられる。ただ、特殊な形のものとして、『文殊師利問經』「囑累品」には、四無量心を含めた「十力・四無畏・大慈大悲大喜大捨」(T14. 505a28-29) という形のものも存在する (Cf. 望月 [1949]、p2362、ジュウb-c)。

に登場する四無量波羅蜜多という概念は、『菩薩藏經』の当該箇所での誤読より派生して登場した概念であると言えるのではないだろうか。すなわち、四無量波羅蜜多という概念は、インドに存在しない概念ではないだろうか。

そして、このような玄奘の誤読の背景には、恐らく、『菩薩藏經』が玄奘三蔵が一番最初に梵語より漢訳した作品であったこともあろう。しかし、幾分かの不十分な点があったとしても玄奘訳の学術的価値の高さは時代を経ても変わらないであろう。

〈参考文献〉

(一次文献)

イエンス・ブロールビック(Jens Braarvig)、松田和信他校訂『Bodhisattvapiṭaka-sūtra』  
未出版

木村高尉1985校訂『Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā II・III』 山喜房佛書林  
(二次文献)

古山健一1997「パーリ十波羅蜜について」『駒澤大学大学院仏教学研究年報』30：81-103  
印順1981『初期大乘佛教之起源與開展』 正聞出版社

山田龍城1977『梵語佛典の諸文献』 平楽寺書店

桜部建1972「karuṇā, mahākaruṇā, 大悲」『佐藤博士古稀記念仏教思想論叢』 山喜房佛書林、123-129

雲井昭善1975「原始仏教に現れた愛の觀念」『仏教思想Ⅰ愛』 平楽寺書店、37-93

藤田宏達1975「初期大乘經典にあらわれた愛」『仏教思想Ⅰ愛』 平楽寺書店、97-135

望月信享1949『望月仏教大辞典』第三卷、世界聖典刊行協会

宇井伯寿1959『實性論研究』 岩波書店

中村瑞隆1967『藏和对訳究竟一乘宝性論研究』 開明堂

権田雷斧1994『権田雷斧著作集』 うしお書店